



四寺廻廊

四寺廻廊だより ◆ 第六号

平成22年
秋冬号

Contents

巻頭法話 ◆

質素と正直

吉田道彦 [瑞巖寺住職]

FEATURE

四寺廻廊写経始めました

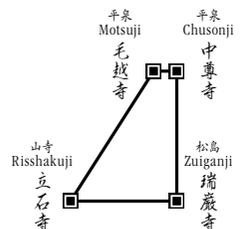
FOCUS

山寺御膳と名物菓子

TOPICS

四寺法要

「法華経一日頓写経会」



www.shijikairou.com

生きた仏教。君には禅がある

東 南アジアの国々を訪れると、一番強く感じる事は、人々の生活の中に仏教がしつかり定着しているという事です。普段の挨拶は、両手を合わせて合掌をいたします。そしてお互いに合掌をすることによって、お互いを尊敬しあう、認め合うという事なのです。合掌をしている人間に、何をするんだといって掴みかかってくる人はまず居ないでしょう。

そして多くの家庭でも地域でも、お年寄りを大切にし、年長者を敬う習慣が自然に出来ています。多くの小学校、中学校を訪ねましたが、子供達が本当に素直で、我々僧侶を敬ってくれる姿、それは恐れ多いという形式的な事ではなく、純粹に敬う姿勢には、いつも感心させられます。

そしてそこには、お釈迦様が仏教をはじめられた時のころ、すなわち衆生は本来、仏であるということを本当に信じている姿があります。

自己の確立に近づけるように努力し、自分が生かされていることに感謝し、他人や他人のものに関しては、慈悲のころを持って常に接する事が実践されており、こ

れこそが約二千六百年前に、お釈迦様が仏教を始められた時から現代まで通用する、生きた仏教ではないでしょうか。

日本から渡った仏教

それでは、インドから始まり、シルクロードを経て中国に伝わり、日本に入ってきた仏教が、近代になって伝わったアメリカ、ヨーロッパにおいてははどうでしょう。私も時々ハワイに行かせていただいています。私もアメリカにおける仏教徒は、ある調査によると三百万人と言われております。人口が二億人を超すアメリカにおいて、三百万人というのは、ほんの一握りです。しかし、キリスト教国であるアメリカにおいて、自分自身の意志によって、仏教徒になっているわけですから、中途半端な気持ちでなく、東南アジアと同じように生活の中に仏教徒としての時間を必ず作っています。普段は職場に行き、午後五時を過ぎると家に戻り、食事を取り、それから自室に戻り坐禅をして自己の究明を図るという生活です。これを「ナイトスタンド・ブディスト」と呼んでおりますが、アメリカにおいても、毎日の一部に、仏教徒としての生活が、きちんと取り入れられており、これはヨーロッパにおいても同じ事が言えます。

質素と正直



彼らは仏教徒として、誇りを持ち、自分は仏教徒であると公言しております。それは、日本にある先祖供養の形でなく、今の自分の生活に、仏教徒としての誇りと「このころ」のやすらぎを求めているからです。

また、海外にある日本のお寺は、こちらの教会などと同じように、日曜礼拝があります。日曜日になると、信者さんがお寺に集まり、お釈迦様や本尊様にお経をあげて、自分の先祖や亡くなった方の為にお祈りをささげます。そして、和尚さんの法話を聞き、帰っていかれます。またある時は、その地域のボランティア活動をしたり、バザーを開いて地域に貢献し、その地域ではなくてはならない存在になっています。

こんな姿を見ていると、その昔の日本を思い起こします。その昔、田舎の方に行きますと、それぞれの村にはお寺があつて、その村の人で困った問題が持ち上がると、和尚さんに相談しようと言つて皆が寺に集まり、話し合いをしたりしました。お寺は子供達の遊び場であつたり、地域の集会所であつたりして、その村や地域にとってなくてはならない存在であつたはずで、そしてそこで幼かつた頃にいろんな事を学び、大人達に怒られながら、いろんな知識を身につけ、いろんな経験をしながら成長していったはずで。

人の仏教の思想に、何もかも捨ててこそ、日本の置かれた状況が把握できるとあり、明治の高官はそう考えたのではないでしょう。うか。

良く日本人は猿真似がうまいと言われています。しかし、どんな職業でもまずは先駆者の真似から始まるのではないのでしょうか。真似が出来てこそ、それを土台に新しい発想が生まれてくる。つまり、基礎が出来てこそ、応用に繋がるという事なのです。

今、我々は本当に何をすべきか

しかし、今こういつた教訓を生かせず、単に崩壊の道に進んでいるのは、毎年のように、日本の代表である首相が変わる、政治家だけではありません。我々の生きていくこの一瞬でさえ、どこかで訳のわからない事故や殺人が起こつて、善良な人々を奈落の底に突き落としています。

昔なら、こんな所には行つてはいけなとか、こういう事をしては駄目だとか、周りの大人達に教えてもらつて、成長していく事が出来ました。しかし、現代社会では、そういった大人達もいなくなり、下手に説教などすると、逆にこちらに挑みかかってくる、いわゆる逆ギレの大人も子供も極端に増えてきております。

しかし現在では、お寺というのは、葬儀や法事の時にしか人が行かなくなつてしまいました。そして葬儀会館やホールが出来ると、葬儀すらお寺でやらなくなつてしまいました。これでは日本人が培つてきた大切な人間形成の場を自ら放棄してしまつていのではないのでしょうか。

ハリスは幕末混乱期の日本人に何を学んだか

幕末、アメリカの総領事として着任したハリスは、自分の仕事である日本と通商条約を結ぶ以上に、このアジアの閉ざされた国を、自分が信じるキリスト教で人々を幸せに導きたいと考えていました。

しかし、日本に滞在するうちに、彼の考えは大きく変わっていきます。彼の日記には「日本人は、皆よく肥え、身なりもよく、幸福そうである。一見したところ富者も貧者もない、これが恐らく人民の本当の幸福の姿なのだろう。日本を開国して外国の影響を受けさせる事が、果たしてこの人々の普遍的な幸福を増進する所以であるかどうか、疑わしくなる。私は質素と正直の黄金時代を、いずれの他の国におけるよりも、より多く日本において見いだす。生命と財産の安全、全般の人々の質素と満足とは、

自分さえ良ければ、自分の事だけを考えれば、この世は生きていけるとでも考えている人間ばかりになってきております。これは日本人というものを否定する、危機的状況なのです。

今一度、明治維新のあの時代のように、外から来た人間にも、日本はなんて安全で平和な素晴らしい国なんだろうと、思つてもらえることが出来るようになるか。本当にそうなる為にはどうすれば良いのか。ハリスの言葉の中に一つのヒントが隠されています。それは彼の言う「質素と正直」という言葉です。

今の時代は、不景気という割には飽食の時代と言われるほど食物が溢れ、少しぐらい形の悪い物は市場にすら出てきません。こんな事をしていては、生産者が手塩にかけて育てた野菜が、まったく浮かばれませんか。何時の頃から日本人はこんな風になつてしまったのでしょうか。物を大切にしているころ、人を思いやる心に、日本人の教育とどうか、道徳の原点があつたのではないのでしょうか。

自分は生かされているという喜び

その昔、百丈懐海ひゃくじょうえいかいぜんし禪師は、八十歳になつても日々の作業（作務）をやめなかつたそ

現在の日本の顕著な姿であるように思われる。」とあります。

幕末のあの混乱期でさえ、欧米人は他に植民地とした国々と日本とをきちんと識別して見ました。これはハリスに見られるように、日本で独自に発展していった、正直で人を敬い、先祖を敬う事を大きな柱とする大乘仏教の思想が、大きく影響していたのではないのでしょうか。

そんな日本人が大きく変革していくのが、この開国による明治期、そして第二次世界大戦後の現代日本でしょう。この二つの変革によつて、自由を得たという事を耳にしますが、はたしてそうでしょうか。開国して文明の波は押し寄せてきました。しかし、江戸時代まで続いた土農工商という制度上の差別を、日本人自らぶち壊しました。インドやネパールなどのように、いまだにカーストを引きずつている訳ではありません。そんな日本の姿を見て、ハリスは驚愕したのだと思います。

この時アメリカを始め、ロシア、イギリス、フランス、ドイツと世界の列強が日本に迫ります。しかし混乱していても、日本人の心の中には敵だろうが味方だろうが、一杯のお茶を出すころの余裕がありました。これこそが日本人が当時の列強をして、日本は手強いと思わせた所以であり、日本

うです。禅師の身体を心配した弟子達が、畑作業をする道具をすべて隠してしましました。その日の禅師は道具がないので作業が出来ません。弟子達は喜びましたが、禅師はその日の食事を「一日作さざれば、一日食らわず」と言つて召し上がらなかつたそうです。

弟子達は自分たちの非を詫び、道具を隠したところから出しました。翌日から禅師は作務に励み、食事を取つたという事です。これは、自分が本当に汗水流して働くことが出来なかつたから食べられないのではなく、自分が仏の道にある僧侶であるから、今日は仏作仏行、仏のために働くことが出来なかつたから、食べられないという事なのです。

つまり、自分はこうして社会から生かされている、生かして頂いているという、感謝の心を持つて生活していけば、自然に感謝の気持ちが始まるはずで、食料についても、ありがたいという気持ちがあれば、多少曲がついても、汚れていても、そんなものは気にならないでしょう。そして日々の生活が、素直で質素になつてくるのではないのでしょうか。自分は仏教徒であることに、誇りが持てるような世界にしていけば、日本は必ず良い方向に向かつていくと信じております。



●しじかいろうしやきょう

四寺廻廊写経始めました

四 寺廻廊の御朱印を集めて四寺を巡っている人は、もう珍しくなくなってきたかもしれません。二回目三回目と続けてくださっている信者の方もいるようです。四寺廻廊事務局では、もつともつと心に残るお参りの旅にしたいと、御朱印に続いて四寺廻廊写経を始めました。旅の途中の宿で写経をして心を和ませたい、初めてだけど写経してみたい、といったつたときお手持ちのペンで書き始められます。書き上げた写経は、次に立ち寄る予定の四寺へ奉納してもよし、自宅に持ち帰って仕上げて事務局に送り納めることもできます。

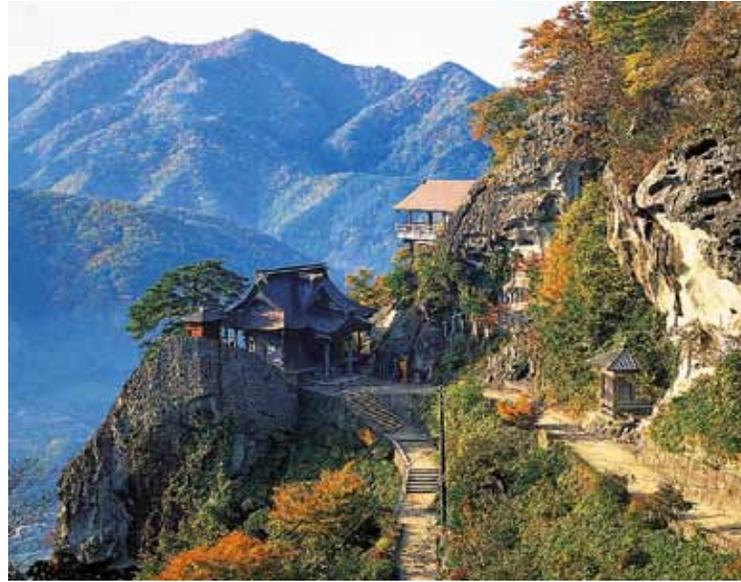
各寺院や事務局に奉納された写経は毎年六月十三日開催される四寺廻廊法要で、ご祈祷・供養されます。ちなみに来年は、瑞巖寺で法要が行われる予定です。

奉納方法は、立石寺、瑞巖寺、中尊寺、毛越寺の札所に用意してある納経料込みの四寺廻廊専用写経用紙をお求めいただき、旅の宿やご自宅に戻らるから、気持ちを落ち着かせてなぞり書きしていただきます。

紙は通常の写経用紙よりも厚いので筆記用具は、フェルトペンや万年筆が使えます。もちろん毛筆でも結構です。書き終えたらミシン線から切り取り、ご奉納ください。

ご奉納された方にはその寺院の印を押した奉納の証のお守りが授けられます。また、同封の封筒を利用して事務局にお送りいただいても奉納の証をお送りいたします。

納める場所は各寺院によって違いまますので、山門や札所でお尋ねください。納めた後の半片は般若心経のお経本としてお使いいただけます。



山寺御膳と名物菓子

●やまでらごぜん・めいぶつがし



山寺の入口前を流れる清流「立谷川」。この川で育ったニジマスとこの川の水で育てた野菜や果物を主に使った精進風料理「山寺御膳」。山寺の歴史や文化に浸りながらその土地に古くから伝わる食の恵みを味わうのも旅の楽しみです。

山寺の紅葉狩りを楽しんだあとの足休めのひとときには、お茶とお菓子。道明寺（上方風桜餅）を生麩で包み地

産の「ずんだ」をのせた「宝珠っ娘」と、やまでら風おやき「宝珠っ子」がおすすめです。

これらの料理は「やまでら名物料理提供店」の黄色いのぼり旗が掲げられている山寺門前町のお店で提供しています。

「山寺御膳」は完全予約制となります。店舗によって取り扱う料理が異なります。

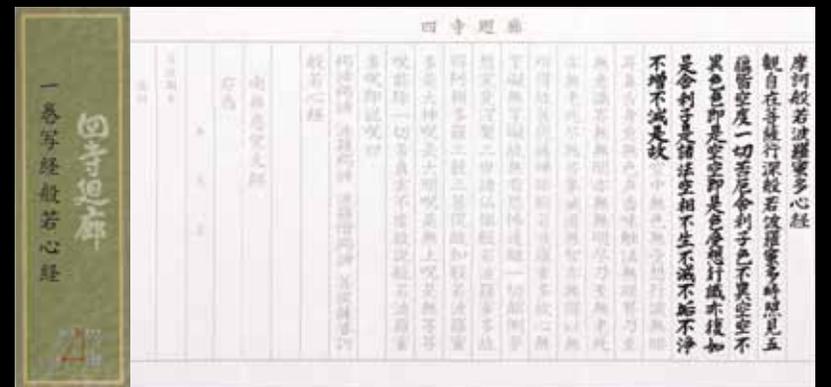


▼書き終えた後は、般若心経のお教本としてお使いいただけます

▼お使いいただく筆記用具はフェルトペンや万年筆でもOKです



▲奉納の証のお守り



◆四寺廻廊写経
…1,000円【納経料込】



(写真左より) ※表示金額は全て税込
「山寺御膳」 2,500円
「宝珠っ娘」 170円
「宝珠っ子」 130円 ~ ※季節によって具材が変わるため
◆お問い合わせ・お申し込み先／「山寺観光協会」 ☎023-695-2816

T O P I C S

四寺法要 「法華経一日頓写経会」

ほけきょういちにちとんしゃきょうえ



慈 覚大師が中国へ求法の旅に出航した六月十三日に毎年とり行われている「慈覚大師報恩四寺法要」が、今年はずんじゅん寺の恒例行事「法華経一日頓写経会」にあわせて開催され、一二〇名を超す方々が参加しました。

当日は午前十時から参加者全員でお経を唱え、法華経の一字一句を一心に写していました。途中昼食を挟んで午後二時三十分まで行われた写経会の間、参加者の心を映すかのように広い堂内は静寂にまつまれています。

この写経会は奥州藤原氏二代基衡公に由来するもので、一日のうちに参加者全員で法華経十巻を書き上げるといふものです。また、参加者が経文を唱え儀式にのっとり行う写経は、慈覚大師が比叡山ではじめられた如法写経という修行としての写経にちなむものです。

法華経十巻を書き上げた後、四寺の僧侶によって慈覚大師を讃仰する報恩法要が行われ、無事写経を完成出来たことに感謝して参加者全員で手を合わせました。

トピックス